徒然寺報 普賢 Fugen

発行所：天台宗高龍山明王院普賢寺
発行人：普賢寺　広報部
〒183-0004　東京都府中市紅葉丘2-26-4
電話 042-369-2278　／FAX：042-336-2610
URL：http://www.fugenji.com
メール：info@fugenji.com
高龍山明王院 普賢寺

回峰行初百日満行

平成29年7月に当山法嗣常寛が比叡山（北嶺）回峰行初百日を満行させていただきました。小僧生活（お堂や阿闍梨さんに仕える下積み）と御礼奉公（修行の御礼として仕える）を併せて約1年間の比叡山での修行生活から戻ってまいりましたので、今回の寺報では、体験記と回峰行をクローズアップ致します。

昨今メディアでも多く取材されるようになったことから、「回峰行」という修行をご存知の方はいらっしゃると思います。しかし、実際に何をしているのかはよくわからない、という方も多いと思いますので、その内容や実体験を記述してまいります。

回峰行のルート

■概要

回峰行とは、読んで字のごとく峰を回る修行です。比叡山の修験道とも呼ばれております。京都の東北、滋賀県に位置する比叡山は峰々が連なって出来ており、霊山として鎮座しております比叡山の回峰行は、元来3つあったのですが、昨今は飯室谷と無動寺谷の回峰行の2つになり、私がご縁があったのは無動寺谷の回峰です。

その比叡山は大きく分けて「東塔」「西塔」「横川」の3つの場所に分けられますが、その3つのエリアの各神仏に歩いて礼拝するのが回峰行です。その距離は七里半（約30km）。礼拝する場所は約260箇所に及びます。

回峰行の拠点となるのは比叡山の最南に位置する無動寺谷明王堂。比叡山ケーブル駅から急勾配の坂をしばらく下るとポツンと出現するのが明王堂です。凛とした空気が漂います。その明王堂近辺のお堂で回峰行者は生活をします。回峰は、明王堂から出発して一周廻って明王堂に帰ってまいります。（上図参照）修行の単位は百日として、千日回峰行者は7年～10年かけて行います。

私がさせていただきましたのは、最初の百日間のみです。百日回峰行を修したものの中から、厳しい会議で選ばれし比叡山の住職が、千日回峰行（十二年籠山として）の許可を得るのです。現存する文献では、51人もの方が千日回峰行を満行しております。

回峰中 無動寺坂を登る法嗣

■目的

この修行の根本精神は、法華経に出て来る「常不軽」の精神です。法華経に常不軽菩薩という、どんなに馬鹿にされても迫害されても誰に対しても敬意を持って礼拝し続けた菩薩のお話があります。この常不軽菩薩は、後の仏陀とも言われております。

回峰行の開祖は相應和尚という平安時代の僧侶です。相應和尚は、その常不軽菩薩の精神に倣い、比叡山入山当初に不軽の行を積むために、根本中堂に約7年間毎日欠かさずにお花をお供えしていました。

その不断の行いに倣い、回峰行者は毎日欠かさずに山川草木諸仏諸菩薩にお詣りします。そして、行の後半からは供華（くげ）と言って全ての礼拝場所に華をお供えします。また、中国天台の開祖　天台大師の仰った「行不退」の精神を受け継ぎ、自身を不動明王に見立てて、どんなことがあろうと行を止めず、常不軽の精神を宿すことが、この修行の最大の目的とも言えます。

素足に草鞋で歩く

■装束

回峰行者の姿格好は独特なものです。最大の特長である未開の蓮華をかたどった桧笠は、不動明王である持仏として必ず携えます。

死装束とも言われる白装束は、行中にいつでも葬式が出来るためという意味です。また、不動明王の蓮台を擬した八葉蓮華の草鞋を履き、腰には死出紐を結び、不動明王の降魔の剣を模した檜扇を腰に刺しております。

これらは、生身の不動明王の表現とも、また、行が半ばで挫折するときは自ら生命を断つという厳しさを示すためともいわれます。百日の回峰行者は素足に草鞋ですが、千日回峰行者の方は、四百日目からは足袋を履き、お笠を頭に頂くことが出来るようになります。また、六百日目からは白帯行者と言われ、杖も携えるようになります。百日か千日かは、見た目ですぐに識別できるようになっているのです。

ただし、百日回峰行者も一度だけお笠を頭に頂き、足袋を履くことを許される日があります。「京都切り廻り」です。阿闍梨様に導かれて、京都の寺社仏閣をお参りし、人のための修行が出来る日です。前日には2周分歩くことになります。

京都切り廻り

この一冊！

千日回峰行

著者　：光永覚道
出版社：春秋社
出版日：2004/3/5

一言コメント
実際に経験された方が
見た境地や体験談が
私たちにもわかりやすく
綴っていらっしゃいます

■概要

伝法して頂いた光永圓道阿闍梨様の師匠の光永覚道阿闍梨様と著書となります。

ご自身が満行された千日回峰行について、詳細まで事細かく書かれた本です。今回の寺報で書いた情報は、百日の回峰行のほんの一端を綴ったものになります。

比叡山の行門において真髄となる千日回峰行について、ご自身の身体の変化や感覚の変化を含めた貴重な体験記が、この本には詰まっております。「堂入り」と呼ばれる、9日間飲まず、食わず、寝ず、横にならず、の凄まじい苦行の詳細も書かれております。この寺報で回峰行にご興味を持たれた方は、その細部まで知ることが出来る本となっておりますので、お薦め致します。

■内容　生活

回峰行者の生活は毎日同じことの繰り返しです。人によって時間の差異は多少ありますが、大体午前1時頃起床。身支度をして勤行を約30分。午前2時前には出峰。約5時間かけて七里半を歩いて帰ってまいります。そこからは普段の小僧生活の始まりです。

千日回峰行者を満行した阿闍梨様に仕える生活です。護摩の準備や片付け、訪ねられる信者さんへのお昼ごはんの用意、お給仕、信者さん宛の札作成や案内状、境内の掃除、毎日の参道掃除などの作務は尽きることがありません。時間を縫って自身の洗濯や札を作成します。一般の皆さんが寝ておられる深夜から早朝にさせていただくからこその修行となります。阿闍梨さんに修行前に言われたことは「己で決めた己のための修行、努力するのは大前提。しんどくて当たり前だ」ということです。

京都切り廻り　清水寺にて
この日だけ“他人”のために修行をさせて頂く
総代さんや住職にも来ていただきました

■師資相承、不文律

現在の回峰行の体裁が整ったのは、室町時代と言われております。織田信長の焼き討ちによりそれ以前の資料は焼失してしまいましたが、千日回峰行は遥か昔から今に至るまで師匠から弟子へと引き継がれております。時代を越えて今なおこの厳しい修行が続いている理由の一つとして、「師資相承」があります。回峰行者がどの場所でお参りして、何を唱えるのかは、初日に千日回峰行者からたった一度だけ「伝法」（共に山を廻って教えてもらう）をして頂きます。それを「手文」と言われる小さい冊子に必死に記述していきます。この手文は、門外不出で回峰行者のみが知ることが出来ます。また、回峰行が厳しいと言われる理由としては先述の「行不退」という不文律があるからです。一度行を始めた人間は、途中でやめることは許されません。途中で回峰ができなくなったら自害をしなければいけません。その厳しさ故に、回峰行は今なお続いているのだと思うのです。

■満行をして

憧れでもあった回峰行は私にとって、誠に幸せな時間でした。初出峰から約3週間は、足が草鞋になれず、皮も何重にもえぐれて、爪もはがれ、捻挫もし、肉離れをして満身創痍でした。一日一日、生きて帰ってこれたことに喜びと安堵を感じておりました。しかし、足も野生化して慣れてくると、本意である礼拝に専念することが出来るようになりました。比叡山に溶け込み、自然、仏様、神社の神様、に礼拝をして、山と一体となる感覚を味わいました。正に法悦の実体験でした。

また、山から普賢寺まで行脚した際にも、沢山の方に支えてもらい、この島と人の美しさを味わいました。この美しい国に生まれ、素晴らしいご縁のもとで、生かされていることに、改めて感謝いたしました。貴重な修行をさせて頂いた恩返しとして、皆様のため、人のため、世のために一層精進して参る次第です。これからが真の修行と感じております。

日吉大社で
信者さんにお加持をする

初出峰の日に光永圓道
大阿闍梨様に伝法して頂く

Info　根本中堂大改修寄進者

青柳	智久様	阿部	健次様	安部	栄子様
新井	達雄様	石巻	常子様	石澤	欣也様
岡野	格也様	片岡	純子様	古山	誠様
斉藤	菊江様	斎藤	良夫様	田島	哲様

ご協力頂いた皆様
誠にありがとうございました

引き続き募集はしております